覗く眼

第7回

覗く目　7-1

署内には、久しぶりの怒鳴り声が響いていた。多くの同僚刑事が、こう思っていたに違いない。
（帰って来させなくても、良かったのに）
（ポンコツが、いつまで張り切ってるんだよ）
（組まされたら、嫌だな）
（沢井、しっかりお守しとけよ）
東京へと呼び戻された、源治だった。

「とにかくね、大内君。こっちも忙しいんだ。君みたいな優秀な部下を、いつまでも他の場所に応援に行かせとく訳にはいかないんだよ」
署長の言葉に（よく言うものだ）、と源治は思う。これ幸いとばかりに、行かせたのは、分かっている。
「いつまでもって言いますけどね、まだ数日しか経ってませんぜ。犯人が『私がやりました』なんて殊勝に出てくる訳じゃねえ。そう簡単に解決できるものか」
「何だね、その言い方は」
署長もムキになる。
部屋にいるのは署長に源治、沢井の三人だけ。他の部下がいなくて良かったと、内心は思っている事だろう。

＊

署長のそれは、苛立ちと言うより焦りだったのかもしれない。実は源治たちを呼び戻す直前に、こんな連絡があったのだ。
「あの大内源治という男だがね、県警にまで調べに行ってるらしいよ」
「は、はぁ・・・」
電話の主は、先日恫喝してきたばかりの警察庁長官だった。
「君もあの男とともに、終わりたいのかね？」
長官の言葉は短かったが、意味は十分に感じ取れたはずだ。もはや「なんとかしろ」ではない。部下もまともにコントロールできない上司に、いよいよ長官は見切りをつけた。恐らくは、そういう事なのだ。
「直ちに、帰還させます！」
署長は軍隊よりもキビキビした動作で、大きな角度で電話口に向かって頭を下げた。そして即座に、源治と沢井に帰って来るようにとの命令を出したのだ。

＊

「それと、気になる事が出たんですがね」

源治は、急に話題を変えてみせた。口調も、落ち着いている。このあたりは、現場でのキャリアの長さが成せる技か。やみくもに言い争いを続ける事はない。
「捜査の書類が、一部改ざんされてるようでして」
「改ざんだって？」
静かな口調にコントロールされてか、署長も興奮を鎮め、聞かない訳にはいかないようだ。源治は、言葉を挟もうとした沢井を目で制し、自ら続けた。
「事件の第一発見者ですがね。私たちがいただいた書類ではあの村の人間のはずだったんですが、どうやら他所から来ていた人間のようでして」
源治は、県警で知った事実をぶつける。
「それは、何か手違いがあったんだろうな」
署長の答えは、素っ気ない。
「手違いね。そんな重要な個所が、手違いですか」
源治の目が署長の目を追う。署長は、逸らしながら続ける。
「とにかく、もう関係ない事件だ。後は県警に差し戻すんだから、そんな不備は無くなるさ」
署長は追い払うような仕草さえ見せ、これ以上関わってくれるなとばかりだ。
「乗りかかった船だ。この事件、最後まで面倒見させてもらいますぜ」
「馬鹿か、君は。私が止めろと言うんだから、止めるんだ！」
再び、署長の方は声を荒げる。けれども、源治は一向に意に介さず、別の要求を突き付けてくる。
「それでだ、署長さん。この沢井なんてトロいのがくっついていると、動きが鈍くなっていけねえ。後は、俺一人でやらせてもらいます」
源治の言葉づかいはいよいよ荒くなり、傍から見てるともはや上司と部下との関係ではない。
「どうして君が決めるんだ！　私は、君も引き上げろって言ってるんだよ」
署長の怒りは、自尊心を傷つけられたためか、それともやはり焦りのせいか。
「署長さん。新聞や週刊誌にはあんまり出てないようだが、こんな奇妙な事件のこと話したら、俺の知ってる記者たちはすぐに食いついて来ますぜ」
「君、私を脅すつもりか」
「じゃあ、さっそく私は村に戻りますんで」
これまでの説得は何だったのか？　源治はさも当然とばかりに、悠々とした態度で署長室を出て行く。
「おやっさん、待ってくださいよ」
署長に一礼をして、沢井は後を追った。

「おやっさん」
「うるせえ」
「待ってくださいよ、おやっさん」
なおも追いすがる沢井の肩を無造作に掴んだ源治は、引きずるように力を込めて、どこかに連れて行こうとする。
「ここなら、誰も来ねえからな」
源治はそう言うとようやく沢井の肩から手を話し、傍にあった長イスに腰かけて、タバコをくわえた。
「座れよ」
沢井を座らせ、火をつける。
そこは、警察署内の廊下の死角のような場所で、源治が一人で考え事をしたりする時などによく来ている場所だ。もっとも最近は、事件の事よりも周囲との軋轢に我慢できない時に来る事が多かったが。
「おやじさん。俺も最後まで手伝わせてくださいよ。足手まといには、なりません」
沢井は座ると同時に、必死で頼み込む。
「馬鹿野郎が」
一瞥すると、源治は沢井の顔を覗きながら苦笑いした。
「お前のことを、足手まといだなんて思っちゃいないよ」
源治の口調は、まるで自らの子どもに言葉をかけるような温かさがある。
「でも、さっき署長に俺を外せって・・・」
「お前はまだ若い。これからだ。俺と一緒に上に背いてたって、得は無え」
源治の言葉に、沢井は一瞬怯む表情を見せた。けれども、すぐに思い直したように言葉を続けた。
「でも、せっかく一緒に追って来た事件です。俺も、この手で犯人を」
源治は大きく、煙を吹きだす。
「沢井、上には従っとけ。組織ってのはな、事件をいくつ解決したとか、どんな難しい犯人を挙げたって事じゃねえ。上手く生きる人間、それが勝ちなんだ」
「俺は出世のために警察に入ったんじゃありません」
沢井の熱のこもった口調に、源治はまた苦笑いする。
「そりゃあみんな、そうさ。でもな、そのうち結婚もすりゃ子どももできる。将来の事も考えなきゃならねえ。人はな、いつまでも同じように生きられねえんだ」
源治の言葉は、沢井への戒めとともに自分への後悔か。
「それにな、今度の件はただ犯人を挙げれば終い、ってもんでもねえ」
「？」
この言葉は、なおも不服そうだった沢井の顔にさらに、疑問の色を加えた。